

# 登録有形文化財 暮らしを支える眼鏡橋

# さんみ 三見橋



通称めがね橋ともよばれる三見橋は、萩市の西部を流れる三見川上流域にあたる床並梅ノ木に架かる石橋で、高欄の親柱には「大正三年二月 工事請負人岡本重次郎」という銘があります。

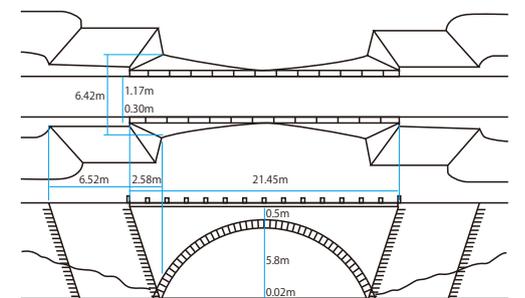
藩政時代、萩から赤間関（下関）への道である赤間関街道北（浦）道筋は、三見床並地区から鎖峠峠（鎖峠）までが山間の急勾配や曲がりの多い難所で、人馬がようやく通ることのできる道でしたが、明治にはいり産業経済発展のために交通の利便性が求められ、県下各地で道路の改修が行われました。

山口県文書館所蔵の「府県道橋梁台帳」には、明治38年（1905）に県道萩小串線の道路橋として架けられた土橋を、大正3年に現在の石造アーチ型に改築したと記されています。長さ34.5m、幅員3.5m、径間16.4m、川からの高さ約13.5mの単一アーチ型の橋は、コンクリート基礎の両脚上に32段の迫石<sup>せりいし</sup>を各々積み上げ、中央で少し大きい要石を打ち込んでアーチ構造を固定しています。地元では「アーチ形の木組を取り外すに際し、せっかく積んだ石組みが崩れ落ちるのではないかと木組を外すのを躊躇した」と伝えられています。ちなみに迫石は萩地方の安山岩の火山岩を使用しています。

路線はその後昭和28年（1953）、県道から島根県益田市と山口県下関市とを結ぶ2級国道に格上げされ、更に同38年、国道整備事業として道路幅を2車線への拡幅時に床並地区は南側の山を削って現在の191号に改修されました。このため床並地区の旧道の約3.3Kmは市道（三見市鎖峠線）となり、現在は床並地区住民の生活道として利用されています。

もとは欄干も石造でしたが、道路舗装を行う時に道路面が高くなって埋没したため、現在は鉄製のガードレールが設置されています。それでも山間の谷間を大きく跨ぐアーチは、曲線美とともに堂々たる威風を感じさせます。この橋の下は公園として整備され、また北浦街道の一里塚が地元の人たちの手によって復元されています。市道になったことで残った三見橋は交通の生き証人であるとともに、地域を見守ってきたシンボルでもあります。

## ■位置図



## 概要

構造形式 石造単アーチ橋  
橋長 34.5m / 幅員 3.5m / 径間 16.4m  
竣工 1914（大正3）年2月  
所在地 山口県萩市三見字梅ノ木 三見川



平成8年に復元された一里塚

